

---

# IF LOVE

D a t t o

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

I F L O V E

### 【Nコード】

N 7 9 2 7 D

### 【作者名】

D a t t o

### 【あらすじ】

叶わないで終わると思ってた、叶うことってあるんだね、あの日のあの学校で先生と生徒とゆう関係で…

「よっちゃん」

岸松 義人<sup>キシマツヨシト</sup>は

肩を叩かれ振り返った

頬に指が刺さった

しまった、はめられた

「引っ掛かった」

誰なのか目を瞑ってもわかる

はめられたからだ

こんなことをする

物好きでガキっぽい

女子高生はアイツしか居ない

「また、お前か苗」

奥鹿 苗 オクシカナエ

長い綺麗な黒髪

不思議なオーラ

自然児

女っ気無し

個性的過ぎる

背の高いスタイルのいい美人な

変人女子高生だ

苗はニツツと笑っていた

岸松は眉間にシワを寄せて

眉をピクピクさせていた

指が頬に刺さったままだ

苗が何度も

笑顔でつつき続けている

「よっちゃん可愛いねえ」

「いつも何なんだよまったく」

よつとスネて呆れた声で言った

苗は尚も笑顔だった

だが、いきなり溜め息をついた

岸松はいきなり過ぎる変わり様に

少し驚いた

「どした？」

「ああ…よっちゃん…」

あたし後2週間で卒業だよ  
寂しいよ…」

悲しげな表情で目をそらし

言った

「どした？お前らしくねえな」

そう言つて苗の顔を覗き込んだ

「だって今みたいに  
よっちゃんイジれなくなるう  
よっちゃんのほっぺ気持ちいのにい」

顔を上げ明るく言つた

でも

無理矢理な気がした

目を細め泣いているが

なんだか目が潤んでる気がした

だが、ずっとニコニコしている

気のせいだと片付けた

「動機不純だぞ

それに俺のほっぺが  
ボロボロになるつうのっ！」

苗のデコを人差し指で

突いた

苗は目をキュツと閉じて

すぐに目を開けまた笑った

「よっちゃんめえ  
遣りやがったなあ！！  
それに  
よっちゃんのほっぺは  
あたしのモンだから」

そういつてVサインをして

後ろを向き

手を振りながら帰っていった

その日から苗が

岸松に近寄らなくなった

気になる…

目が合う

苗が走ってその場を去る

岸松の授業では

苗は毎回保健室に行くか  
に行くか

先生達に見つからない所で

うろちよろする

2週間があつと言う間に

あと3日…

岸松は部活の用事で

屋上にある倉庫に向かった

夕方は、まだ少し寒い

でも、最近眠すぎてるので



目を覚ますには丁度良かった

屋上は2段になっており

2段には仕切りの壁があつて

倉庫はその壁の奥に在った

寒くて目が覚めたが

すぐに寒さが眠さに重なり

段々体が重くなつてきた

（やっべえ無理が祟つたなあ…  
早く用事済まして帰んねえと）

小走りで倉庫に向かった

中には小さなランプしかなく

よく周りが見えなかった

探している物がなかなか見つからない

（…！？）

いきなり体から力が抜けて

床に倒れ込んだ

（やっべえ…ココじゃ気付かれねえ……）

段々と意識が

遠退いていくのが解った

どれくらい時間が経ったのだろう

ぼんやりと目が覚めた

倉庫の中だと言ったことを

すぐ理解した

（…！？俺１人だったよな）

誰かが

岸松に後ろから抱きついて寝ていた

暖かさが伝わってきていた

目を覚まし

自分に抱きついていて手を見た

…すぐに解ったよく見た手だ

更に

黄色のスカジャンが

その手を境に上の部分に掛かっていた  
スカジャンもアイツのだ

耳を澄ますと

小さい寝息が聞こえた

かわいい…

手をそつと離し

寝返りをうつて

顔を確認した

やっぱりアイツだった

苗：

その寝顔は小さい子の様だった

鼻をつまんだ

苦しそうに唸った

目を覚ました

目があった

こんなに顔が近いのは初めてだ

苗がニコツと笑った

寝起きのその顔は

いつもに増して

純粹で素直で可愛かった

なんだか顔が熱くなってきた

「おはよ..  
よっちゃん」

ふわふわした声

柔らかな笑顔

薄暗い部屋の中で輝いてる

長い綺麗な黒髪

「よっちゃん大丈夫？」

「大丈夫だよ  
ありがとう」

笑顔で返し

黒髪をそつと撫でた

苗は少し驚いた顔をして

目を瞑り

岸松の胸に顔を埋めた

岸松もそつと抱きしめた

苗が震えてる

「寒いか…？」

苗は大きく首を横に振った

「よっちゃん…」

あたし…怖いよ…」

気づいた

泣いてる

「よっちゃん…」

会えなくなっちゃうよ…」

寂しいよ…」

よっちゃんが居なかったら

あたし…」

「苗！！」

泣くな！！」

岸松がさつきよりも強く抱き締めた

岸松が辛そうな顔をしていた

苗は岸松のシャツを強く握った

「苗…

俺もお前と離れたくねえよ！！

なあ…ずっと俺と居てくれよ…

寂しかった苗にずっと会えなくて  
辛かった苗にずっと避けられてて

なあ…俺を1人にすんなよ  
一緒に居てくれよ…なっ？」

苗が俯いたままゆっくり頷いた

岸松は苗の肩を掴んで

座らせた

尚も下を向き続ける苗

岸松の手が苗の顎に触れた

「…！？」

何も言わず

キスをした

優しく

温かく

深いキス…

「苗：俺バカかも…  
最近になって苗が好きって気づいた」

照れながら

苗の様子を伺いつつ言った

苗が笑った…

「本当にバカだよ…  
あたしはずうっと  
初めて喋った2年の時から…  
ずうっと…  
好きだったっの…」



苗も照れた

目が合った…

笑った…

また キスをした…

「苗…なんでココに来たの？」

「屋上は…あたしの…住処だから」

「そっか…嬉しい…

苗が居てくれて…

愛してる…」

「うん…」

しばらく何も言わず

2人愛を確かめる様に

手を握ったり

キスをしたりした

2人の恋が実った日

「帰んなきゃな…」

「そうだね…  
つて…今何時？」

時計を見た

「やつべえ…12時だあ…  
苗ゴメンな…  
早く帰んなきゃな…  
つて平気か1人暮らしだもんな？」

「うん…  
でも、帰る」

2人は手を繋いで倉庫から出た  
外は寒かった

上を見上げた

「…星!!」

綺麗に星が輝いていた

「ホントだ星だ…」

苗はそーゆうの好きだよなあ」

「うん…」

「でも今の夜空なんてまだまだでさ  
苗は

1人だから行つてないと思うけど  
自然の中での夜空はもっと  
綺麗なんだよ…」

「ふうん…」

いいなあ…」

よっちゃんは

そんな綺麗な物を知ってるんだね

…誰と見たんだろ

あたしが隣りになりたいなあ」

「苗って甘えん坊だな！

…俺恥ずかしながら

年々彼女居ない歴だから…

だから誰とも見てねえよ

…苗が卒業したら一緒に見に行こ」

「うん、行つて上げる」

「上からかよ（笑）」

2人はそんな事を言いながら

降りて行つた

夜の学校は静かで

昼間と違う表情を見せていた

職員室には今日は徹夜組は居らず

苗が居ても平気だった

幸運なことだ

岸松はデスクを片付け

ロッカーに荷物を取りに行き

私服に着替えた

「意外によつちゃん…  
服のセンスイイねえ」

「意外って何だよ」

「もつとダサダサかと思った  
だって

たまに髪ボツサボサだから（笑」

「髪はめんどいんだもん」

沢山笑いながら駐車場に向かった

遅いので岸松が車で送る事になった

岸松の車は白のボックスで

中也シンプルだった

苗は家に着くまでに寝てしまった

岸松はたまに苗の寝顔を見ながら

苗の家に向かった

家に着いても苗は起きず

仕方なく玄関まで向かった

アパートだか警備もしっかりとし

かなり綺麗なアパートだった

苗は一人暮らしだが

親が居ないわけではなく

親が海外で働いてるために

1人暮らしをしている

更に親はお金持ちなので

いいアパートに住んでいる

それに親の秘書やお手伝いさんも

沢山居るので困ることはない

頼もしい親だ

アパートの前まで来て困った…

オート・ロック…

苗を起こすしかない

致し方ないことだ

折角起こさなかったのに水の泡だ

「苗ナンバーわかんねえよ」

「……………」

「苗ナンバーだけ言えばいいからあ」

「……………5……………9……………7……………5……………\*!」

「ありがとうー」

…ついでに鍵…」

後ろからヌツと手が出て来た

苗を背負っているから

苗だと分かるが

いきなり手が来ると怖い物だ

さて 苗の手から鍵を受け取り

ナンバーを打った

「ありがとう苗もう寝てイイよ  
おやすみ」

苗は速攻で寝た

岸松はエレベーターに乗って

苗の家まで上がった

苗の家は

学校の用事で先生として



数回来ているので知っていた

鍵を開け電気のスイッチを探した

すぐにスイッチは見つかった

リビングもここで操作できるので

玄関とリビングの電気を付けた

廊下を通り抜けリビングに出た

いつもと違った

全く生活感もなく

殺風景で

ソファーとテレビしかなかった

いつもはもっと家具があり

高級感溢れていた

苗をソファーに下ろし

廊下に出て部屋を1つづつ見て行った

3 部屋中2 部屋何も無かった

1 部屋は苗の部屋らしく

ベットと机・本棚・ピアノがあつた

いくら1 人だからと言っても

物が少なすぎる

それに前と違いすぎる

前のもつとインテリアなどがあり

高級感溢れていた

リビングに戻り

苗を起こした

「おい…苗…起きろ」

苗は起きない

苗のほっぺを引っ張ってみた

苗が唸った

今度はペチペチと叩いた

緊迫していたはずが

面白くて笑ってしまった

改めてちゃんと起こす

「苗！！起きろ！！」

苗が寝ぼけながらも

やっと起きた

良く寝る子だ

眠そうに目を擦りながら

起き上がった

「何？」

「家の中どうしたんだよ!？」

苗がにっこり微笑んだ

「実家に送った  
ヤケクソかなあ……」

苗は突発的なのは知っていたが

ここまでとわ

思っていなかった

「どんなヤケクソだよ……」

呆れた

苗は更にピースまでした

「よっちゃんへの恋わずらい」

「……俺のせいだよ」

「うん」

「なら俺がお詫びしないとな」

しばらく考え

伺うように

苗の顔を覗き込んだ

「生活しにくそうだから…」

卒業したら俺んちで生活する？」

恥ずかしがりながら

言っと苗は満面の笑みを見せた

苗は義人の頭を撫でた

義人はちよつとだけ拗ねた

苗はそれを見てから深く頷いた

「約束」

そう言つて小指を出した

義人も小指を出し

指きりげんまんをした

長い…

長い…

長すぎる!!

校長にPTA会長早く終われ!!

誰もが感動の無い唯一の時間

卒業する

この後涙の別れが待ってる

長いようで

短い

そんな3年間

とりあえず校長のはなしは

3年間の中で1番

長いと感じた時間だろう

苗は隣の女子と話し

義人は先生らしく

背筋を伸ばし立っている

スーツが格好いい

髪はワックスを使い

整えられている

いつもより

大人の男と言った感じだ

苗は喋りながらも

ちらほら見ては

目に焼き付けていた

義人も苗の横顔を

たまに見ていた

目が合うことは無かった

長い長い卒業式が終わった

中庭で卒業生達が泣いたり

騒いだりしていた

人数が多く凄い騒ぎだ

先生達の周りには

写真を撮るため集まっていた

義人の周りにも

生徒達が集まっていた

まだ若い義人は

結構な人気振りだった



他の先生達より

生徒の数が多くガヤガヤしている

苗はそこに居なかった

苗はその中庭自体に居なかった

義人は少しして

その事実気付いた

だが先生としてココから

居なくなる事は出来なかった

仕方なく時が過ぎるのを待った

長い長い

最後のお別れが終わった

義人は生徒に手を振りつつ

生徒用玄関に向かった

目指すは

今日までの

3年6組5番

奥鹿 苗の下駄箱

…靴が在る

まだ学校に居る

校内ダツシュ

先生だつて今時廊下は走る

向かったのは

6組の教室

勢いよく中に飛び込んだ

居ない

また廊下を走った

卒業式後の校舎は

人がかなり少なく走りやすく

そんなことに感謝

向かったのは図書室

…居ない

階段を駆け上がる

もう足がパンパンだ

一番上まで上がった

屋上へのドア

勢いよく蹴り開けた

鉄だったので

意外に痛くジンジンした

だがすぐに屋上を走り回った

最後に見たのは

倉庫…

苗と義人の新たな

始まりとなった場所

「お疲れさま」

苗が倉庫の上に座って

手をヒラヒラと振っていた

義人は息切れして

膝に手を付いていた

『…いなく…なるなよ…っはあ』

「…居なくなれないよ  
どこに居たって  
よっちゃんが見つけ出すから」

『…………』

驚き混じり

嬉しさ混じり

顔が少し火照ったのを感じた

苗はそれを見て

満足げに微笑んでいた

小悪魔的な少女だ

「よっちゃんあたし卒業したよ」

「うん、おめでとう」

「ありがとう」

苗は倉庫の上から

ジャンプして降りた

そして義人の前に立った

「もう付き合って  
問題ないんだよね？」

「多分ね」

「なら…言葉が欲しい」

「言葉？」

苗がニッコリと頷いた

すると義人は

呆れたように笑った

そしてキスをした

優しい優しい愛のキス

抱き合う

ふわりとした温もり

「言葉じゃないよ？」

「言葉より

キスしたかった

苗：愛してる」

「愛してる」

叶うはずなかった

有り得ないような恋

それでも叶った恋

それは本当の恋

消えることは無い

愛のある生活は良いモノだ

たまには恋する

それが永遠に変わる

それでも良いんだ

これから2人で一生を生きよう

「っじゃ家帰ろっか？」

「先生の家？」

「もう2人の家だよ」

「そっか」

愛は2人のすべてです

END



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7927d/>

---

IF LOVE

2010年11月13日02時36分発行